

【事業レポート】おでかけアリオス三和プロジェクト・三和小学校での3年間（前編）

2019.2.21

ピアニスト・田村緑さんが、2016年から3年間にわたりいわき市三和地区を訪れ、三和小学校はじめ、三和のあちこちでコンサートやワークショップを行いながら地域の皆さんと交流してきた「おでかけアリオス・三和プロジェクト」。これから何回かにわけて、この3年間の取り組みについて、ご紹介したいと思います。



文：前田優子（いわきアリオス 企画制作課）

写真：田子和司、いわきアリオス（※）

田村緑さんが、「おでかけアリオス アソシエイト・アーティスト」に就任されたのは2016年。「おでかけアリオス」全般のアドバイスを行っていただくと同時に、ピアニスト・田村緑として、これまでになかったアウトリーチプログラムで、いわきの皆さんとさらに交流を深めていきたい、というご提案をいただきました。そこでひとつの地域に3年間継続して訪問し、地域の皆さんと交流するプログラムとして、「おでかけアリオス三和プロジェクト」が始まりました。

いわき市三和地区は、市内で最大の面積を有する、山あいのまちです。市内では数年前から、少子高齢化が進む地域の小・中学校の統廃合が断続的にすすめられていますが、三和地区では、2014年度末に統廃合が行われ、5つの小学校が統合されて三和小学校、3つの中学校が三和中学校にそれぞれ統合されました。



※

（おでかけアリオスでは、統廃合で閉校になる小・中学校の校歌をレコーディングするお手伝いをしました）

三和小学校の先生方は、広い三和の各地区から通ってくる子どもたちが、同じ目標のもとにとり組める「新しい伝統」をつくりたいと、すでに様々な試みをされていました。「おでかけアリオス」にも、子どもたちが様々な形で芸術に親しむ中で、ふるさと・三和への愛着を持つことができるようなプログラムにしてほしい、というミッションを託されました。そこで、3年間をかけ、音楽を聴くだけでなく、自分で奏でることや、美術など他のジャンルとのコラボレーションを体験したり、オリジナル作品の創作を試みる、継続的なプログラムに取り組むことになりました。このような試みは、小学校はもちろん、アリオスにとって、そして田村緑さんにとっても、初めての挑戦でした。

初めて子どもたちに出会ったのは2016年の9月初旬。4年生が方部音楽祭（＝いわき市内の小学4年生が地区ごとに集まり、合唱や合奏などの学習成果を発表する音楽祭）で演奏する「三和太鼓」のお披露目を聴かせてもらいました。



※

なんとこの曲は校長先生の作曲！幾重にも重なるリズムを合わせてただだけでなく、太鼓と太鼓の間を動きながらの大熱演に、緑さんは驚き、感動していました。この曲も、三和小学校の「新しい伝統」の1つの形なのでした。

初年度は、4年生～6年生を対象に、3回のコンサートを行いました。
テーマは、「聴く耳をひらく、音を心に住まわす」。



「ピアノ」という楽器についての知識や音色・響きそのもの、楽曲の構造や曲の生まれる成り立ち、作曲者の思いなど、こどもたちの興味・関心の入口をなるべく広げられるよう、様々な工夫をこらしたプログラムづくりは、緑さんの真骨頂です。さらに、子どもたちの感想やアンケート、先生方とのミーティングの内容を参考にしながら、毎回全力投球でコンサートを届けました。



初回は、お互いに緊張してしまったか、やりとりも若干ぎこちなさが残るものでした。もしかすると、こちら側の「気負い」のようなものが伝わってしまったのかもしれませんが。緑さんはプランをあらためて考え直し、2回目のコンサートでは、ご自身の子も時代からピアニストになるまでのストーリーを交えたプログラムを届けました。「共感」というバイブレーションが音楽室に満ち、子どもたちの心の中に、緑さんへの親しみの感情と一緒に、音楽が確かに染み通っていくのを感じました。子どもたちを見守る先生方も、安堵した表情をされていたのがとても印象的でした。そして、最終回では、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ『悲愴』をじっくりと鑑賞しました。



(2016年度に取り上げた作品)

木下牧子 編 きらきら星

ラヴェル 水の戯れ

ピアノのひみつ

リスト 波の上を渡るパオラの聖フランチェスコ

メンデルスゾーン 甘い思い出

田村緑 かなしいゆめ

リスト ラ・レジェレッツァ

ラフマニノフ 鐘

ベートーヴェン エリーゼのために

ベートーヴェン 交響曲第5番「運命」より

ベートーヴェン ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」

ベートーヴェン 交響曲第9番「歓喜の歌」より

2017年度（2年目）のテーマは「音楽の多様性を体感・体験する」。

ここからは、パーカッショニストで美術家の渡辺亮さんをサポート・アーティストとしてお迎えし、ジャンルにとらわれない音楽に触れたり、感じたことを音や色彩、言葉で表現するワークショップを行いました。



2年目ということもあり、参加した5年生、6年生は最初からオープンマインドで、初めての体験も臆せずトライしてくれました。

渡辺亮さんのパーカッションと、田村緑さんのピアノによるコラボレーションで聴くドビュッシーの「月の光」は、まるで絵画のような独特な音世界... さらに、手拍子やハンドベル、プラスチックの小さなボトルにビーズを入れた手作りシェイカーと一緒に演奏を楽しんだり、モーツァルトの「トルコ行進曲」を様々なアレンジで聴きました。



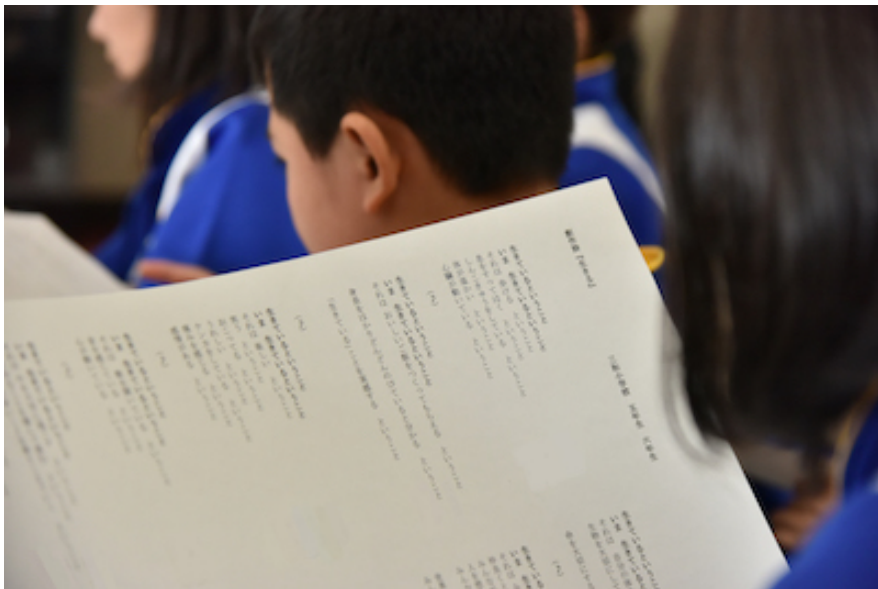
2回目の「音楽美術館 MIWA」と題された2回目のワークショップは、驚きの内容でした。



ムソルグスキーの「展覧会の絵」を題材に、音楽を聴いてイメージしたものを、一人ひとりが色紙のコラージュで表現し、全員のコラージュを組み上げて創った作品を展示した中で、あらためて全曲を聴く、という内容です。



3回目は、詩人・谷川俊太郎さんの「生きる」という作品を題材に、「あなたにとって、生きる、とは？」という問いかけをし、子どもたちを書いてもらった「生きているということ」を、緑さんが構成し、創作詩「生きる」を制作。



さらにその内容に、パーカッションを使って即興で音を奏で、朗読パフォーマンス作品に仕上げるという内容でした。



※

(出来上がった作品は、その場でレコーディングし、CDに！)

(2017年度に取り上げた作品)

エルガー 愛の挨拶

ハチャトゥリアン 剣の舞

パッヘルベル カノン

ドビュッシー 月の光

モーツァルト トルコ行進曲

ムソルグスキー 展覧会の絵

谷川俊太郎 生きる

J.S.バッハ 平均律クラヴィーア曲集第1集 第1番「プレリュード」

このほか、番外編として、いわき市教育委員会が主催する、地域の歴史や産業について学ぶ「いわき・わくわく仕事塾」に参加。



※

三和町差塩（さいそ）地区で、地元の木材を使った建築を手がける大工さんに、木組みの技術を目の前で見せていただいたり、永井地区の昔話の語り部・大木久仁子さんと一緒に、永井に残る妖怪伝説の地をバスで巡ったり、妖怪のスケッチを描いたり...



※

一緒に三和を巡ったこの体験は、翌年（2018年）の作品作りに活かされていくことになります。（つづく）